

名誉教授森田昌幸先生の最終講義によせて

柳 澤 智 美

城西大学現代政策学部社会経済システム学科 教授

1 最終講義当日

2024年9月15日に、城西大学名誉教授森田昌幸先生の最終講義が紀尾井町の1号棟1302室にて行われた。最終講義を聞きに、当日はオンライン参加も含め100名以上の卒業生や教員が参加した。

講義テーマは「国際紛争をなくすために」であった。ご自身の子ども時代から、学生時代の学び、研究の軌跡を振り返るかたちとなった。途中、多くの森田節を入れつつ、子どものときから、研究者として志した学生時代、そして研究者になってから研究への道に進むことへの葛藤、進んでからの紆余曲折と、その時々のご自身の思いなどを話されていた。

その後、懇親会会場へと移動した。卒業生と教員を含めて70人以上の参加となった。懇親会の会場では期ごとにわかれて壇上にあがり挨拶をし、現在の状況などを伝えつつ、森田先生と記念撮影をして、最後に記念品と花束を贈呈して終了となった。

2 森田先生との出会い

思えば、森田先生との初めての出会いは、高校3年生のときであった。誕生日は来ていたので、18歳である。附属高校からの進学だった。当時、城西高校の生徒の8割は城西大学に進学していたと思う。それだけ多い人数の面接をするのであるから、おそらく面接官も総動員で出ていたに違いない。その数ある組合せを潜り抜けて森田先生が私の面接官だったのだ。今思えば、本当に偶然が重なったといえる。そして、その偶然ともいえる面接は忘れられないものとなった。椅子に座ることを勧められ、受験番号と名前を言った私に、森田先生は、開口一番「君はなんだね!」と言われたのである。さて、どう返事をしたらいいのであろうか。高校では面接練習の代表者に選ばれて皆の前で高校の先生と模擬面接をした。足をトントンとしてしまう癖などを指摘されたものの概ね良好の模擬面接であった。にもかかわらず、練習してきた最初の挨拶など何一つ役には立たない最初の一言であった。何か印象の良いことを言わないといけないと、焦るが、考えても何も出てこない。こんなときに限って、出てくるのは昨日、必死に覚えたコメの輸入問題とかばかりであった。どうしても、答えられないときは、「勉強不足でわかりません」と

いう言葉が通常は使える。しかし、「君はなんだね!」という質問に対しては無力であった。困り果てた私は、おそらく10秒くらい森田先生を凝視し続けた結果、「それを見つけないかと思い、ここに来ました」と言った。正直言えば何も思いつかなかったのである。森田先生は、そんな私の返答に対して怒るでもなく「そうか、そうか」と大笑いをされていた。そのあとは、森田先生と一緒に面接をされていた先生の厳しい質問などもあったが、何を言ったらいいかわからないという質問もなく、面接は終了となったのであった。面接の間、始終先生が笑っていたのを覚えている。だが、その後ずっと「きみはなんだね!」という言葉が残り続けていくこととなる。

3 森田先生の大学での講義

年代によっても違うかもしれないが、政治学と政治学概説という講義を履修していた。教職免許を取得しようとする时必须履修する講義だった。先生が講義室に入って来た瞬間に、面接官の先生だと思いだした。面接官の時は髪を短くされており、僧正のような印象だったが、銀髪が少し混り流れるような髪型だった。初回の講義なので講義担当者の説明や、この講義は何をする講義かという説明をされるのかと思っていた。しかし、先生はいきなり、最近話題の政治家の話をして、君たちもニュースを見ていると思うが、これはけしからん! と話し出した。ノートをとるべきかどうか迷っていたが、笑いすぎてノートをとるのをやめてしまった。どんなに頑張っても、この面白い話を書き留めることは無理だと思った。

私が大学生の頃は、大学の講義は座学が中心であった。多くの講義がテキストを買って、重要な部分を先生が説明をし、ノートをとって、わからないところは質問するという講義であった。勇気や度胸のいる講義は少なかった。ところが、森田先生も一応、テキストというものは存在していた。先生が書かれた本もあったが、講義を通して、一度も買うように言われたことがなかった。少なくとも私の時は講義中に、紹介もされていなかった。毎回、最近の時事に関する簡潔なプリントが配布され、その問題について過去からの経緯や先生の視点などの説明を受けたのち、教室にいる学生に、どう考えるか、どうしたらいいかを問うものであった。今、思えばアクティブラーニングのはしりといえるのではないかと思う。自分で考えて、発表して他の学生に質問して、先生に解答を求めてということを繰り返す。時には、学生どうし言い争いになったりもするが、そのような時は、私たちの準備が足りていないため議論がなりたっていないのである。テーマに関しての知識が不十分だと話し合いに参加できないばかりでなく、自分の意見が否定されたとしても説明ができない。ディベートという形式をとっていたわけではないので、自分の主張を如何に合理的に説明して納得してもらうか、それが事実と反していたとしても信じている主張を教室の学生に説明する勇気や度胸が必要であった。今で言えば、答えのない課題に向き合っていたのである。それゆえ、準備が足りないとただの感情論になってしまったり、喧嘩腰になってしまったりするのである。そうならないためには、講義の前に、先生がどんなテーマで本日の講義をして、どのような視点で話を学生にしてくるか考えていかななくてはいけなかった。準備に必要

な時間は、もとの知識量に反比例するのであろうか、私は相当な時間をかけなければいけなかった。準備をしていったにもかかわらず、1つも準備したテーマが該当せず、時間が過ぎ去るのを待つしかないときも多かった。そんなときは、本当に情けない思いで下を向いているしかなかった。まかり間違っても、当てられたりすると少ない知識を絞り出すしかない。この時、答えのない課題に取り組むためには、多くの知識が必要であり、近道など1つもなく、ただひたすら自分が知らないことと向き合う必要があるのだということを学んだ。それは、どこまで行っても終わることがなかったのである。

4 森田ゼミ

城西大学経済学部は経済学科と経営学科に分かれていた。もちろん経済学や経営学の先生が多い。現在はなくなってしまったが、城西大学に4号館という建物が存在していたとき、4号館4階に森田先生の研究室があった。この4号館4階には森田先生の他に、法学の畑尻先生と国文学の黄色先生の研究室が並んでいた。経済でも経営でもない先生が並んでいるというのがまた面白い。森田先生は、質問にいくと歓迎してくれた。いつもパイプをくわえていた。パイプと言えは、名探偵シャーロック・ホームズを思い浮かべる。当時の私は、ちょうど探偵小説に夢中になっていた。が、森田先生の様子は、小説の中のシャーロック・ホームズというよりはむしろ、小説を書いている作家が締め切り前にイライラしてパイプを持って歩いているような印象を受けていた。喫煙所以外ではタバコが吸えない今日では考えられないことであるが、4号館4階に行くと、パイプの香りで先生がいるかいないかがわったのであった。先生の講義の後には、多くの学生が先生の部屋を訪ねていた。いつも多くの学生が森田先生に質問をするために研究室をたずねていた。振り返れば、先生は忙しい中でも、学生との時間を本当に大切にしてくれていたのだと思う。部活終わりに、4号館の上を見たときに研究室に灯りがともっており、思わずまだいるのかと先生の研究室を友人と訪ねた。そのとき、先生は色々な書類を整理されており、「こういうことは苦手なんだよ」と笑っていらした。学生が帰ってからご自身のことをされていたのだと思う。面倒見がいいのとは違うかもしれないが、どんなときでも私たちの質問を正面から受け止めてくれていた先生であった。そのためか、森田ゼミは人気があるゼミの1つであった。常に、30人や40人受けていたと思う。森田ゼミの先輩がゼミに来ないかと勧誘することはあっても、先生ご自身がゼミ生を勧誘するようなことはなかった。

森田ゼミの先輩方は個性が豊だったと記憶している。1年生の時に話をする機会もあつたか、当時4年生の森田ゼミの先輩まで知っていた。面白くて、個性的でいて生命力が強く、何より度胸があった。スマートで知的な二枚目かと思えば、驚くほどの三枚目もこなす。森田先生がいてもいなくてもゼミをはじめて、自分たちで議論を始め、今日はもう終わりました！ と引き上げいってしまったりもする。教員に依存することがなく誰もいなくても一人でも生きていけるような先輩方が多かった。良い手本に恵まれたと思う。そして、私は、同級生にも恵まれていた。知識量も能力も

高く優秀な同級生が多かった。勉強熱心でしっかりと学ぶことができる人たちがばかりだったし、いざというときににいか活動をすれば、全員で頼りないゼミ長の私を助けてくれていた。この学年は、あまりに全員が優秀すぎて、先輩たちも、ゼミ長を決めることができなかったのだと思う。全員が持ち回りでもいいのではないかなと思うような、能力の高い人が多かったのを覚えている。そんな中で、私がゼミ長だと先輩方に指名されたとき、これはしょうがないなという雰囲気が全体に流れていた。忘れもしないが、私の右隣の同級生は目が泳いでいた。予想外というよりも角がたたない選択に拍子抜けしたのかもしれない。先輩方は、誰がなっても文句がでるなら、一番文句がでない選択をされたのではないかな。大学生にして、その判断力と、賭けのような判断を森田先生は許されたのだと思う。その証拠に、ゼミ長の候補には色々な学生の名前が出ていたのだろう。10数年後の同窓会の会場で、「この期のゼミ長だったよね？」という質問を数名の先輩が別々の同期に別々に聞いていた。卒業して数十年たって、ああ、やはりなと確信した瞬間であった。色々候補がいて、迷った結果を先輩たちは忘れていたり、記憶があいまいになっていたりしたのだと思う。そして、私は同時に、支えてくれた同期生全員に感謝を改めてしたのであった。

以上のような話からもわかるように、森田ゼミは大まかな方針は先生が決められているが、方法や活動や、内容は学生に多くの自由を与えてくれた。私たちの提案を否定することは少なかった。大いにやってみなさいと言ってくれる。失敗しても怒るようなこともなかった。そのかわり頼ることも出来ない。当時は不満も覚えたが、今思えば、生き抜く力や他者と一緒に活動することの重要性を学ぶことができた。人に恵まれたということもあるが、自分に能力がないとき、一人だけでは達成できないようなことを実行するときは、他者と行動することで可能になることを学べた。

5 先生の研究テーマ

ゼミの研究テーマは一見、移り変わっているようにもとれるが、ゼミの中で先生が私たちに話された「人はなぜ平等でないのか」、「ある意味でとはなんだ」、「人が自分のためだけに生きていたら今の世の中は成り立っていない」という問いかけから、一貫して持ち続けていた先生のテーマは「責任と覚悟」ではないだろうかと思う。

当時の先生は一定の知識水準を担保した資格試験のようなゴールを目指す学びよりも、自ら課題や疑問を持った学びをゼミ生に要求していた。知的好奇心への重要性などばかりではなく、好奇心の先に覚悟を求められていた。それは、自分がやろうと決めたことをやり抜く覚悟であった。先生は世の中を不平等だとは言われたことはない。だが、平等ではないといっていた。人は何かしら平等ではないと感じ、差別がなくすべてが等しい状況であると思うことは難しいが、そこには人がかかわる余地があり、平等にするべくかかわる覚悟が試されるのである。その信念や思い、学問を学問として言葉だけで述べるのではなく、本気でやりぬく実学としての覚悟を示唆するという教えであったと思う。

あるとき、ゼミの発表の中で学生が「ある意味では正解だと思う」と述べた。なんの不思議も

なく、私たちは納得しようとしていたその時、森田先生は「ある意味とはどういう意味だ！」と、いつになく激しい口調で聞き返していた。彼は「自分では、評価が難しいものの、別の視点から見ると正しいと見えるかもしれないと思いました」と述べていた。素晴らしい解答だと思ったが、その時に「自分ではっきりしていないことを正しいというのか？ 自分の発言に責任を持つ必要があるだろ」と森田先生は、いつになく厳しく言われ、誰が正しいといっているんだと再度聞き直されていた。その時の先生の気迫ある言葉は多くのゼミ生の記憶に残るほど激しいものであった。その時以来、私たちゼミ生は「ある意味」という言葉を使うことはない。今回の最終講義で久しぶりにあった同期も、「あの時のことを覚えている、あれ以来、ある意味という言葉を使ったことはない」と言っていた。ある意味ではなく、自分の言葉として正しいと思うのか正しくないと思うのか、はっきりした上で何故そう思うのかを自分で説明することに努めた。当たり前のように使っていた言葉だったこともあり、当時はついつい言いそうになったこともあった。しかし、私たちの中では、「ある意味」という言葉は選択肢から外されていったのである。それほど激しい口調で自分の言葉や思いの責任について、先生が言及されたのであった。発してしまった言葉の責任と、その重み、自らが述べたことの重みについて私たちは知ることができた。

そして、最後に今で言えば、利己的利他的という言葉にあたると思われるが、当時は「自分のために」という使い方をしていたと思う。自分を犠牲にしても、他人のために行動することを利他的行動という。また、自分自身のために行動することを利己的行動と言われている。ここに、人々が利他的あるいは利己的に行動する程度のことを社会的選好と言うのであるが、この社会的選好が話題としてあげられた。ゼミの中で、社会経済という問いの中で、社会でどのように商品やサービスが生まれ、お金が動き、私たちの社会全体の活動はどのような動きになるのかという発表をしていた。社会問題を総合的に捉えつづいかに人は自分のために動くのかという理論構成であった。つまり、人が何かを決める時は、まずは自分であって、人のために自分が不利になるような選択はしないという発表であった。発表の仕方も上手なこともあって、少なくとも私は異論をささむことはできなかった。その時である。森田先生は「それは事実か？」と問いかけられた。学生も「事実です！」と返答をする。そのようなやりとりがいくつかあり、最後に先生が述べられていた言葉は、今でも忘れられない一言だった。「人が自分のためだけに全てを選択していたら、今の世界はない」と断言されていた。自分のためにだけに選択していないということは、あえて損をするような選択をすることもあるということなのか。先生は、損をするとは述べられなかった。ただ、人は自分のためにだけに生きているわけではないということを私たちに伝えたかったのではないかと思う。これらの森田先生の言葉から、私は、援助や支援活動という分野に関心を持つこととなったのである。

6 「大問題」と共助社会

森田先生の口癖で、「大問題なんだよ！」という言葉がある。日本は経済的な繁栄を得て、安

全で安心な社会の実現を目指してきた。しかし、経済が低迷する中で、不安や焦りから、必要以上に課題が大きな課題に見えてしまい、自ら問題を大きくしているのではないかと思える部分もある。例えば、少子・高齢化が進展し、高齢者人口が急増する中で、従来のように公的年金等の社会保障制度のみで高齢者の生活を支えることは難しいと言われており、生産人口と言われる世帯の負担が大きくなると述べられている。とかく私たちの議論や論点は「〇〇をすることは難しい」、「〇〇することは困難である」、また、マイナスの表現としての「〇〇となる可能性がある」という議論が先にたつ。「〇〇すれば維持できる」、「〇〇すれば、可能性がある」など何かをプラスすることの議論が少ない。できないことをあげ、その理由を述べるだけにとどまることが多い。「〇〇をすることは難しい」というどこか第三者的であり、自分が解決しようと努力する要素がない議論が目立つ。議論のための議論となり不安だけを残す。ところが、森田先生の「大問題なんだよ！」は、自己責任原則というのか、自分のこととして考え自分の行動や言葉に責任を持つようにということが根底にあり、自分で動くことが前提である。どうしたらいいのだろうか、考えなくてはいけない。そのために「大問題」となるのである。なぜなら、それらは自己の判断に起因するすべてを自らが負うからである。

ローマクラブ（2022年11月）にあるように2100年に向けて世界には大きくわけて2つのシナリオがある。それらは、何もしなければ来る社会というのではなく自らのこととして動くことで得られるシナリオである。情報、サービス、雇用、所得の面で、持てる者と持たざる者の間の格差の拡大する世界で、将来の不安だけをかかえ誰かが何かをしてくれることに期待をするのではなく、自分にとっての「大問題」と向き合う必要が出ている。全てのことに一人で向き合うことはできないため、向き合えることは限られている。それゆえ、自らの専門や興味の対象と向き合い、何ができるか考えていくこととなる。

私は、ゼミの2年間で「人と人とのつながりの重要性」を学んだ。一人で活動することが1の効果しか生み出さないのに対して、一緒に考えてくれる同期がいることで1.2にも2にもなっていた。チームやグループで動くことの必要性を感じた。これは、現在の研究テーマでもある共助につながっていったと思われる。人と人との多様なつながりや、地域の方との交流などが、自分では考えてもいなかった活動や発展を生みだしている。経済社会の活力を維持しつつ、子育てに適した社会環境を整備し、人生100年時代に向けた豊かな生活を確保していかなければならない。非常に忙しい社会において一人でできることは限られている。課題は多く、道のりは険しい。しかし、自立した自助努力と、行政が行う公助、そして、ボランティア活動を含むさまざまな形の共助が相互に関連しあっていくことによって、課題とされていることの解決の一部を担うこととなる。人口減少とともに、ますます財政上の制約が強まり、公助には限界が生じる。そのため、自立した自助と、日々の生活における共助の重要性が相対的に高まるといえる。公助に求められることは、自助と共助を支援する体制整備である。人と人が助け合い、支え合う社会づくりによって、私たちの社会が生み出す価値は1よりも大きくなると期待したい。

地域というコミュニティの中で人口の確保という価値観もまた改めていくべきであろう。減少

する日本の人口を奪い合うような考え方ではなく、定住人口は少なくともその地域を訪れる交流する人、関係人口が増加するような1人がいくつもの地域と関連するような社会の構造を可能とする制度を作り替えていく必要がある。奪い合う経済ではなく分け合う経済が必要なのだといえる。こうした交流によって、人口減少を恐れることなく今後の対策に挑むことができるといえる。多くの大問題を目の前にして、共助社会は解決方法の1つとして提案していきたいと思う。

7 最後に

森田先生は、ご講演の間、実にいきいきとした口調と表情を私たちになげかけてくれた。そして、やはり森田先生の講義は面白いと感じた。話し方、話題の提供の仕方、そして話題に引き込む力など、85歳にして衰えを知らない。私たちは、永遠にその背中には手が届かないのであろう。まだまだ新しい視点で研究テーマに取り組まれていくのだらうなと思うと、まだまだ先生に教えを請いたい。

私自身、政治学のゼミにはいたが興味の対象は経済学であった。経済学部経営学科政治学のゼミと30年以上前の大学生としては、不思議な肩書であったといえる。だが、それゆえ多方面から物事を見ることができ政策学の大学院進学ができたともいえる。森田先生と再び大学で会うことになった際は、大学院で政策学を学び、会社員として10年以上過ごした後であった。そして、ある時にまた質問されたのである「君はなんだね」と。久しぶりにお会いした森田先生は学部長の重責を担っていた。その後、副学長にもなられ、忙しい日々をすごされていた。いつも、城西大学を日本一の大学にと言われていた。その覚悟で大学と向き合っていたのであろう。同僚というにはおこがましいが同じ空間に存在し、先生の夢や努力を近くで見ることができた。日々の雑務に追われて、同じ敷地内にいるときにもっと多くのことを話し、学びを乞うべきであったと、深く後悔している。だが、今回は、先生の問に、勇気と度胸をもって今は「先生と同じように自分の理想を、微力ながら追い求めています」と答えることができた。その際も大笑いされたが、「大いにやりたまえ」と今回は激励の言葉が追加されていた。

森田先生、どうぞこれからもますますお元気で、森田節を私たちになげかけ、いつまでも叱咤激励し、一歩も二歩も前を歩んでいてください。私たちゼミ生一同、先生の背中を見て追いかけていきたいと思います。

参考文献

- (1) 森田昌幸,「現代国際政治論」犀書房, 1974.3
- (2) S. ディクソン＝デクレーブ ほか,「Earth for all 万人のための地球:『成長の限界』から50年ローマクラブ新レポート」森秀行ほか訳, 丸善出版, 2022.11